

中公叢書

読書のユートピア

清水 徹著

中央公論社

中公叢書



読書のユートピア

清水 徹著

中央公論社

読書のユートピア

〈中公叢書〉 ©1977

昭和52年6月20日印刷 昭和52年6月30日発行 検印廃止

著者 清水 徹 発行者 高梨 茂 印刷所 奥村印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京2—34

1977年
中公叢書

目次

序章 読書のユートピア——あるいは読書の悪徳について

I

起源の小説——大岡昇平『幼年』、『少年』

宴のあとに——吉田健一論 1

時間、この至高なるもの——吉田健一論 2

《聖なるもの》のまねび——古井由吉『聖』ひじり

迷宮のなかの散歩——武田泰淳『目まいのする散歩』

小説言語の誕生——清岡卓行論

小説の四次元時空——ナタリー・サロート『あの彼らの声が……』クロード・シモン『ファルサロスの戦い』、『盲目のオリオン』

165

133

117

101

85

46

26

7

II

不決定の美学——吉行淳之介『怖ろしい場所』

吉行淳之介論補足——その文体とイメージ

夢の周辺飛行——後藤明生『夢かたり』、安部公房『笑う月』

III

文明と文学のあいだ——谷崎潤一郎の再評価をめぐる

二重性の忍耐——大江健三郎『ピンチランナー調書』

喜劇性からの飛翔——アイリス・マードック『ブラック・プリンス』

こころみの道——島尾敏雄論

終章 時間を読む

336

304

281

262

242

223

204

186

読書のユートピア

宮川
淳仁

序章 読書のユートピア——あるいは読書の悪徳について

1 毎年七月のはじめになると、フランスでは、日刊新聞や週刊誌の文芸欄が、また文芸週刊紙が、《夏休み^{ヴァカンス}の読書のために》とか《夏休み^{ヴァカンス}になにをもってゆくか?》というたぐいの特集を一齐に組んで、小説・詩・伝記から歴史・哲学・社会科学にいたる短評つき《推薦書リスト》を掲載するという習慣がある。

2 《夏休みの推薦書リスト》にどんな本がならぶか。手許にある一九七六年の『ル・モンド』紙文芸欄と『カンゼーヌ・リテレル』紙(月二回発行の文芸新聞)を見てみよう。いわゆる純文学畑の刊小説類、ケン・キージー『郭公の巢』、キューバの作家アレホ・カルペンティエールの新作『パロック協奏曲』、ベスト・セラーになった実録物、バラードのSFなど。それらに混じって、バルザック『個人生活風景』新校訂版(これだけでふつうの小説十冊分はある!)とか、『フロイト・ユング

往復書簡集』という専門書まで挙げられている。娯楽設備などほとんどない海岸や田園で数週間のあいだ、SFやミステリーを耽読したり、評判の新刊小説にゆっくりと眼をとおしたり、高校の授業で習っただけだった『人間喜劇』の世界に深く沈潜したり、二大精神分析学者の交流と決裂の内幕を想ったりする。なんとたる読書のユートピアか！……

もちろん、事情はそう単純ではない。じつは、最近の統計によればフランス人の七十パーセントは平均して年に一冊以上の本を読んでいないし（たぶん日本のほうが読書率は高いだろう）、発行部数から言っても『ル・モンド』紙文芸欄に眼を走らせる人びとの数などたかが知れている。まるで絵に書いたような《読書のユートピア》を実現しているひとたちは、さあ、いったいどれくらいいるのだろうか？ 数はわからない。それでも、本を読むことを職業としていない一般人で、そういう《夏休みの読書》を習慣として実行している人びとが確実にいることを、ぼくは経験から知っている。たとえば、秋から冬の社交のシーズンに話題にするためであれ、彼らは楽しみながら読んでいる。

3 言うまでもなく夏休みの社会制度も海岸や高原の風俗もまるでちがう日本から遠眼鏡でフランスをのぞいて、いかにも《読書のユートピア》らしく見える風習を羨んでも、なんの意味もない。フランスのジャーナリズムの毎夏恒例の特集から、ぼくは、理念としての《読書のユートピア》を思うのである。「晴耕雨読」という言葉も、同じ理念を志向しているはずだ。そして、《読書のユートピア》に行きつくための切符は、ただひとつ、《読書の楽しみ》しかない。長い夏休み、娯楽設備のない退

屈な海岸、人口のすくなさ、そういったものはたかだか急行券くらいの役にしかたぬ。急行券だけでは目的地に辿りつけない。ぼくらはまず正規の乗車券を手に入れねばならぬ。

4 快楽はひとから教えられるものではない。自分で経験してみるしか、ぼくらは快楽を知ることができぬ。多くの読書論がいかにか高邁な議論を展開しても、所詮、乗車券売場への道順図と、目的の地の景観を示すポスター以上のものでないのはそれゆえである。だがそうした読書論のなかで、ヴァレリー・ラルポーの『罰せられざる悪徳・読書』（岩崎力訳）は、やや特別な地位を占めている。それは、なによりもまず、ラルポーが読書を「悪徳」と規定している点にある。

5 「読書は一種の悪徳なのだ。私たちがつねに強烈な愉悦感をもってちかえる習慣、私たちがそのなかに逃避し、ひとり閉じこもる習慣、私たちを慰め、ちょっとした幻滅の憂晴らしともなる習慣、そういった習慣がすべて悪徳であるように。〔……〕読書が悪徳だというのは、また、つぎのような理由にもよる。すなわち、経験に照らしても統計のうえからも、これは、他の悪徳と同じく、例外的で異常な習慣だということ。正常な人間が本を読むのは職業上の必要に迫られてのことであり、さもなければ仕事や労苦から気をまぎらせるためである。読書の楽しみだけのために読書し、熱心にその楽しみを追い求める人間は例外的存在なのである。」

6 このような規定を前提として、ラルポーは、楽しみをあたえてくれるという以外に現実生活にはなんの役にもたぬ文学作品を耽読する「悪徳」に、ひとがどのような過程をへて墮落してゆくか、そうした墮落の極点に誕生する「理想的読者」はどのような《読書のユートピア》を経験しうるかを語ってゆく。はじめに子供部屋の夢想がある。紙の扉にかくされた「驚異の世界と無尽蔵の宝」がある。しかしそれは、学校で教えられる教科書の無味乾燥、面倒な宿題によって圧殺される。辛うじて、「まるで自分自身のもののように思える思考や感情を表現」した現代作家の小説や詩を発見した生徒たちだけが、先に進むことができる。彼らはいろいろと手を伸ばしはじめる。情熱をいろいろな書物で養い育ててゆく。有名作家こそは偉大な作家だという無邪気な信仰、逆に、知られざる神々を自分ひとりだけで崇める自恃、そういう畏にはまって、そのまま前進し墮落を停止してしまうものも多いが、「自分自身のもののように思える思考や感情」を書物のなかに、いわば鏡像のように見るという経験は、この若き読者に自分を意識することを教える。そうやって彼に獲得されたまなざしは、やがて、自分のほかに他があること、同時代文学のほかに情熱を注ぐに価する文学があることを彼に教える。彼は外国語の習得をはじめたり、情熱の赴くままにひとりの作家に没頭して「試験の準備をなおざりにしてしまふ」。「ちようど恋に落ちた男が女のために借金を重ねるように」彼は読書という「悪徳」にのめりこんでゆく。それでもまだ、彼の「悪徳」が癒され、情熱の危険から救いだされ、読書そのものから遠ざかってしまふ誘惑の畏が待ちかまえている。ひとつは稀覯本愛蔵というフェティシズム、もうひとつは文学作品を研究対象としてしか見ない学者的態度。それをすら乗り越えた

き、彼の「悪徳」はほぼ完成されるだろう。彼の眼前には、ヘロドトス、ラブレ、スペインの神秘思想家、現代ドイツ抒情詩、ダダ、ヘンリー・ジェームズという名前をもつ国々よりなる広大な大陸がひろがっており、彼はこの書物の世界へと自由に旅することができる。快楽に裏づけられた鑑識眼の持主となった彼は、最後の誘惑、「つまらぬ本を告発する」という誘惑も乗り越えるだろう。

7 「こきおろすことを業なりわいとすることは、もともと無精な彼に嫌悪感を抱かせる。新人なら人々の注意を自分に惹きつけるための、批評家なら自分を怖れさせるための浅ましい手段、——彼はその業のなかに、せいぜいそんなものしか見てとることができない。それは業として不潔なものであり、掘立小屋で力業を見せるどき廻りの荒くれ男とか、荷役人足の憂晴しとか、人夫、仲仕のたぐいを連想させる。」

8 読書という「悪徳」はこうして完成される。快楽の娘としてえられた教養を身につけた「理想的読者」がここに誕生する。広大な書物の世界の旅人である彼は、歴史の彼方に忘れ去られた小作家もまたひそかに愛して、あまりひとの読まぬその文章の諧調に魅せられながらも、平衡感覚を失っていない。

9 語学力にすぐれ、ジョイスをもっとも早く発見し、繊細な言語感覚を示す作品を書き、しかも財

産に恵まれていたラルボーは、のぞみうる理想的読者にもっとも近いひとりであった。しかし、このエッセーに彼の自己満足の口調は聞えない。彼はみずからの理想像を刻みあげ、情熱の火を燃えつづけさせるためにこれを書いたのである。読書という「悪徳」に浸りつづけることこそ、文学を、情熱の対象として、また社会制度として——もし、社会のなかに存在を許されているという、ただそれだけの理由で、この無益な「悪徳」に「制度」という名前をあたえうるとすれば——、永続せしめる唯一の方途だというラルボーのひそかな自覚を読みとることができるはずである。

10 しかしまた、読書という「悪徳」に申し分なく浸ったひとをラルボーが「教養人」と呼び、「至高の叡智へと導かれる貴族階級」と名づけるのを読むとき、彼が読書をそういう安定性へと結びつけたところに、ぼくは彼の幸福なる限界を見ないではいられない。たしかに、理想的読者はまぎれもない教養の持主ではあるだろう。だが同時に、読書をいわば一種の快感原則に支えられた「悪徳」だと見るまなざしは、じつは文学にひそむ奇怪な構造——文学の社会的効用という種類のものではなく、文学それ自体にひそむもの——にまで到るのではないか。ラルボーがそれに気がついていたらどうか、ぼくには定かではないが、すくなくともこのエッセーには語られていない。その奇怪な構造とはどういうことか。ぼくはここで、ラルボーの定義する理想的読者が経験するであろう状態をまえて名づけた《読書のユートピア》という言葉に戻らねばならぬ。

11 「読書の楽しみだけのための読書」がやがて到りつく境地を、ぼくは《読書のユートピア》と名づけたのだが、思えば、この名称には二重の意味がある。読書という行為のもっとも理想的な状態という意味と、読書それ自体がぼくらを、あるユートピア¹¹どこにもない国へ連れてゆくという意味と。

書斎の机のまえに坐って、いやどこでもいい、海岸の砂浜に置いたデッキチェアに横たわってでも、野原にごろりと寝そべてでもいい、——そうやって本を読む。そのときひろげている本がバルザックであれば、眼前に十九世紀はじめのパリが、薄汚い下宿屋ヴォーケール館やフォーブル・サン＝ジェルマンの華やかな貴族のサロンが浮かびあがる。それが東京にいてロンドンを想う人間の登場する作品であれば（吉田健一のある小説のように）、東京とロンドンとが二重写しになった虚の場所が読書空間のなかに成立するはずだ。また、サロートの『あの彼らの声が……』ならば、読者は、ただ書物のなかにしかありえない時間構造を経験するだろう。ところで一方、読書にどれほど没頭してしまおうと、ぼくら自身の現実がまったくゼロとなることはない。「われを忘れて読む」とは、あくまで誇張法だ。ぼくらの現実感覚は、いわば宙づりにされ、半虚像化された奇妙な状態にある。とする、そういう読書過程においてぼくらの経験している空間と時間とはどういうものか？ なかば虚像化された机のまえや砂浜と、そこを流れる現在時の上に、同じようにイマージュとしてのみある十九世紀のパリ、あるいは一九三〇年代の東京が重なった、一種の超空間と超時間。どこにもない空間と、どこにもない時間。読書の楽しみを構成する要素としては、物語の面白さ、精妙な語のきらめきなど

のなかに、読書行為それ自体を包みこむ、読書行為そのものが分泌した、そういうどこにもない空間、どこにもない時間、もまた当然数えあげられねばならぬ。理想的読者は、「図書館の椅子に腰掛けたままでも、時間と空間のなかを旅することができる」とラルボーは言っているが、その旅はただたんにヘロドトスとともに古代ギリシアに、『源氏物語』とともに王朝時代の貴族社交界に赴くというだけ、一重の旅ではないのである。

12 ぼくら平凡な一読者でも、通常の時間軸にも空間軸にも座標をおろすことのできぬユートピアを経験することができる。ましてラルボーの想い描いた理想的読者、さまざまな時代、さまざまな国語による作品を楽しみ味わう読者ならば…… いわばひとつの図書館の蔵書全体がきわめて有機的に（といって文学史的にでもなく、また図書分類番号順にでもなく）入り混じり、たがいに呼び交わり、ちょうど廻転する多面体に多彩な光線があてられているように、さまざまな面々書物がかわるがわるきらめき、しかもその多面体も光線もたえず複雑・繊巧の度を増してゆく、——彼はそんな《読書のユートピア》を経験するのではないか。

13 現代アルゼンチンの作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスを想い浮かべよう。ラルボーより十八歳年下のボルヘスもまた、おそらく、現実存在しうるもつとも理想的な読者のひとりであるばかりか、彼の全作品は、読書の楽しみと、読書という行為そのものへの深い省察に基礎を置いている。ラルボー